

Garrard 401 の再構成(6)(HP 収載) —トランスの交換—

1. はじめに

Garrard 401 の再構成を機会にトランスを交換して試聴することにしました。

2. Garrard 401 の再構成の試聴方法

Garrard 401 のシステムにおけるトランスの使用に関するこれまでの経過を整理しますと、以下のようになります。

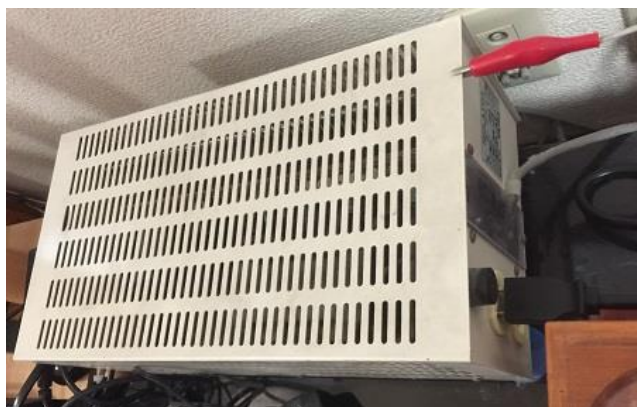
[Garrard401 の整備\(8\)](#)ではカートリッジは ZYX R100-EX で Ortofon の ST-7 を使用しています。

[アナログマジックの導入\(8\)](#)では、SPU Royal N のカートリッジで、Ortofon の ST-7 と Beyer のマイクトランスを使用しています。

[アナログマジックの導入\(9\)](#)では、SPU Royal N のカートリッジで、しなの音蔵オリジナルトランスと Northern Electric のトランスを使用しています。

以上の結果から、出力の小さい SPU Royal N はハムを引きやすいので、ハムの小さい Beyer のマイクトランスを使う機会が多くなりました。

Garrard 401 の再構成の後、Garrard 401 の再構成(2)での試聴においてハムの改善を認めましたが、ボリュームを上げると、まだハムがでます。そこで見落としはないかと検討し、50Hz 仕様の Garrard 401 を使用するため、60Hz⇄50Hz の周波数変換器を使用していますので、まずは、この変換器もシャシーアースを取ってから、トランスを替えてみました。



使用するトランスは、Ortofon の ST-7、しなの音蔵オリジナルトランス、Northern Electric のトランスです。



3. Garrard 401 の再構成の試聴結果

Ortofon の ST-7 では、これまでの経過では、ハムを引きやすかったのですが、随分とハムレベルが低減されていますが、ボリュームを上げると気になるレベルです。それ故、SPU Royal N の繊細な表現力が生きてバロックアンサンブルなどは実に爽やかに聴くことができます。Beyer のマイクトランスと比べると、細かい音が拾っていますが、曲によっては多少神経質に感じたり、低弦の重量感が薄らいだりして、Beyer のマイクトランスの中庸なパフォーマンスが好ましい場合もあります。

しなの音蔵オリジナルトランスでは、もともと SPU G シリーズなどと組み合わせると豪快な鳴り方をするとところがありましたが、SPU Royal N と ST-7 の組み合わせの神経質なところが、払しょくされ、繊細さも残しながら躍動感を持たせ、重量感もあります。Beyer のマイクトランスよりレンジも広いので、これまで SPU Royal N では、あまり良い印象がなかった大編成のオーケストラもスケール感を感じながら聴くことができます。

Northern Electric のトランスでは、フォノケーブルのアースを取らない方がハムレベルは低くなります。このトランスの持ち味は、抜けが良く、明るく生き生きとしたところです。反面、バロックアンサンブルなどでは、陰影感が欲しいところです。試みにアメリカンポップスをかけてみますと、明るい鳴り方がマッチするようです。

4、まとめ

Garrard 401 の再構成により、それぞれのトランスの味わいが明確に捉えられるようになりました。

以上

